

刻翻『故事部類抄』(一)

——曲亭叢書——

曲亭叢書研究会

凡 例

一 本稿は、早稲田大学中央図書館「曲亭叢書」所収の、曲亭馬琴自筆『故事部類抄』(イ4 600 51~55)五巻五冊を翻刻するものである。

一 翻刻にあたっては、できるだけ底本通りとすることを原則にしたが、便宜上、以下の諸点に手を加えた。

1 漢字は、原則として新字体を用いた。誤字・当て字などはそのままにし、(ママ)と注し補記した。ただし、印刷の都合上省略したところもある。

2 踊字の「ヒ」などは、仮名は「ヽ」、漢字は「々」に統一した。

送り仮名のうち、次の文字は以下のごとく表記した。「コ」↓コト、「ソ」↓シテ、「ヒ」↓トモ、「子」↓ネ。

3 句点・読点・中黒などは、底本には原則として施されていないが、適宜補った。例外的なものは「」で示した。連続符「」は省略した。例、「如何」↓「如何」。

4 濁点・見セ消チなど、明らかな誤記は訂正した。

5 本文中の二行割部は、へゝの中に示した。

6 送り仮名とルビは、字間を調整して区別できるように配慮したが、印刷の都合上必ずしも厳密なものとはなっていない。
7 出典原文を省略したと思われる部分については、数文字程度のものは訓点を含めて（一）の中に適宜補い、長文にわたる場合は「中略」記号で示した。

8 書名、部立ての下に補った（一）部は、翻刻者の注である。例、「（後補表紙の書題簽）」。

9 本文中の年号表記など、明らかな誤りと思われるものは、※を施し、各項末尾に注した。

10 欄外書入れ・貼紙などは、*をもってその位置を示し、適当と思われるところへ挿入した。

11 『日本書紀』に関しては、日本古典文学大系本に依拠して異同を示した。『平家物語』についても大系本を参照したが、「中略」記号などを補うにとどめた。その他は解題にゆずる。

今回は第一冊の「天部」と「地部」を翻刻した。以下、順次連載の予定である。解題は翻刻完結後に記す。『故事部類抄』の概略については、播本真一「『故事部類抄』について——『南総里見八犬伝』との関連を中心に——」（『日本文学研究』第三十三号、大東文化大学日本文学会、一九九四年一月）を参照のこと。

曲亭叢書研究会

柴田光彦

谷協理史

雲英末雄

播本真一

二又淳

柿本美知

故事部類抄一 (後補表紙の書題簽)

天部 (元表紙一)

霧

伊弉諾尊・伊弉冉尊、二神、立_{シテ}于_ニ天_{アマノサキ}霧之中_{キリノナカ}
(二)曰、吾欲_{アノミテ}得_レ國_{クニ}、乃以_{ソノ}天瓊矛_{アメノササギ}(二)指_{シクサシ}垂_{サリシカハ}而探_{サシ}
之_ヲ得_エ(二)磯_{イソ}馭_ヨ盧_ロ嶋_ト則拔_テ矛_コ而喜_{ヨシテ}之_ヲ曰、善乎_{イカナ}、國之_{クニノ}
在_{ケル}矣。神代卷

風 霧

伊弉諾尊曰、我所生_{アガマル}之國_{クニ}、唯有_テ三朝霧_{ミナサキ}而、薰_{テル}滿_{ミツ}之_ヲ
哉、乃吹_{フク}撥_ハ之_ヲ氣_{イキ}、化_ナ為_ル神_{カミ}一_{ヒト}号_{ナヅケ}曰_ハ綴_ツ長_{ナガ}戸_ト辺_ヘ命_{ミコト}一_{ヒト}亦_ハ
曰_ハ綴_ツ長_{ナガ}津_ツ彦_{ヒコ}命_{ミコト}一_{ヒト}是_レ風_{カゼ}神_{カミ}也。神代卷

雷

伊弉諾尊、拔_テ劍_{ツルギ}斬_ツ軻_コ遇_ユ突_ツ智_チ一_{ヒト}為_{ナス}(二)三_ミ段_{タマ}一_{ヒト}其_ノ一_{ヒト}段_{タマ}
是_レ為_{ナル}(二)雷_{ライ}神_{カミ}一_{ヒト}日本紀異說

雨

于_レ時_{トキ}、霖_{ナカメフル}也。素戔_{スサノヲ}烏_カ尊_{ミコト}、結_ユ束_{ヒテ}青_{アヲ}草_ヲ一_{ヒト}以_テ為_ス笠_{サカ}
蓑_ト、而乞_フ(二)宿_ス於_ニ衆_{モロ}神_{カミ}一_{ヒト}。々々曰_ク、汝_{イマシハ}是_レ躬_{ミミ}行_ニ濁_ニ
惡_{ハクシテ}、而見_{ラル}(二)遂_ス謫_シ一_{ヒト}者_ヲ。如何_{ソコ}乞_フ宿_ス於_ニ我_ニ一_{ヒト}遂_ニ同_ニ
距_{フセク}之_ヲ。是_ヲ以_テ風_{カゼ}雨_{アメ}雖_レ甚_{ハナタ}、不_レ得_ニ留_リ休_ム一_{ヒト}而辛_シ
苦_{ナミツ}降_{タリス}矣。自_{ソレ}爾_ノ以_テ來_{カタ}、世_ヨ諱_フ著_{キテ}笠_{サカ}蓑_ト以_テ入_{ヒト}他人_ノ
屋_ヤ內_ニ又_ニ諱_フ負_ム束_{ヒテ}草_ヲ一_{ヒト}以_テ入_{ヒト}他人_ノ家_ノ內_ニ有_ル犯_スレ
此_レ者_ヲ、必_ズ償_フ解_キ除_ヘ一_{ヒト}此_レ太_ホ古_コ之_ノ遺_ヰ法_{ホソ}也。日本紀一說

日

戊_ツ午_ウ年_キ(中_{ウツ}略_キ)夏_{ウツ}四_シ月_{グハツ}丙_{ヘイ}申_{シン}朔_{セツ}甲_カ辰_{チン}、皇_{ミコト}師_シ勒_ト一_{ヒト}兵_{ヘイ}
步_フ趣_ク竜_{リウ}田_{テン}一_{ヒト}而_ニ其_ノ路_{ミチ}狹_{セマ}峻_{ツルギ}人_{ヒト}不_レ得_ニ並_{ナミ}行_{コトヲ}一_{ヒト}乃_ハ還_{ケル}
更_{マタ}欲_{ホス}東_{トウ}躡_カ胆_{タン}駒_コ山_{サン}一_{ヒト}而_ニ入_{ヒト}中_{チュウ}州_{シュウ}一_{ヒト}時_{トキ}長_{ナガ}髓_{ズイ}彦_{ヒコ}聞_ク之_ヲ曰_ハ
夫_{カノ}天_{アメノ}神_{カミ}子_コ等_ト所_ヨ以_テ來_キ一_{ヒト}者_ヲ、必_ズ將_{マサニ}奪_ハ一_{ヒト}我_ニ國_{クニ}一_{ヒト}則_ハ尽_ツ
起_キ一_{ヒト}屬_{リョク}兵_{ヘイ}一_{ヒト}徵_キ之_ヲ於_ニ孔_{コン}舍_{シャ}衛_ヱ坂_{ハカ}一_{ヒト}與_{トモニ}之_ヲ會_ヘ戰_{セン}有_リ三_ミ流_{リウ}
矢_ヤ一_{ヒト}中_{チュウ}ニ五_ゴ瀨_セ命_{ミコト}肱_{ヒコ}脛_{キン}皇_{ミコト}師_シ不_レ能_ニ進_{シン}戰_{セン}一_{ヒト}天_{アメノ}皇_{ミコト}憂_ウ之_ヲ
乃_ハ運_ユ二_ニ神_{カミ}策_{サツ}於_ニ冲_{ウツ}杵_キ一_{ヒト}曰_ハ、今_{イマ}我_ニ是_レ日_ヒ神_{カミ}子_コ
孫_ニ而_ニ向_ム日_ヒ征_{セイ}虜_ロ一_{ヒト}此_レ逆_{ギャク}二_ニ天_{アメノ}道_{ミチ}一_{ヒト}也。不_レ若_ニ退_ヒ還_{ケル}一_{ヒト}

推古三十六年、夏四月壬午朔辛卯、電アラレフル零。大如サ桃子。

壬辰、電アラレフル零。大如サ李子。日本紀

旱

推古三十六年、自レ春至レ夏、旱之。日本紀

飢饉

推古三十四年、六月、雪フレリ也。是歲、自二三月一至二七月一、霖雨。天下大飢之。老者噉クラヒテ草根、而

死ニ于道。垂ノホリニ幼者含キ乳、以テ母子共死。又強盜竊盜、

(並)大起。日本紀

星

舒明天皇六年秋八月、長星見ニ南方。時人曰ハ彗星。日本紀

本紀

蝕

顯額天皇八年春正月壬辰朔、日蝕。舒明紀

星 天狗

舒明天皇九年二月丙辰朔戊寅、大星從ナル東流ル西。便有テ音似雷。時人曰、流星之音。亦曰、地雷。於是、

僧旻僧曰、非流星。是天狗也。其吼聲似雷耳。日本紀

雲

皇極天皇元年夏六月、大旱。(秋)七月甲寅朔壬戌、客星入レ(月)。(中略)蘇我大臣(蝦夷)(中略)、即屈マツシマセテ請

衆僧、讀シム大乘經等。于時、蘇我大臣、手執ニ香鑪

(燒香)發願。辛巳、微雨。壬午、不能レ祈雨。故停ム讀經。八月甲申朔、天皇幸ニ南淵、河上、跪ニ拜ニ四方。仰テ天而祈。即雷大雨。(遂雨)五日。溥ウルホシ

潤天下。於是、天下百姓、俱ニ稱萬歲。曰ニ至德一。天

皇。日本紀

皇極天皇二年夏四月(庚辰)朔(中略)甲辰、近江国

言、電下。其大徑一寸。日本紀

雲

皇極二年(春)正月壬子朔旦、五色大雲、滿イハミホヘリ覆ヨリ

於天、而闕シテ於寅。一色青。霧周ニ起ス於地。辛

於天、而闕シテ於寅。一色青。霧周ニ起ス於地。辛

西、(大)風。^フ日本紀

風

天智七年、沙門道行、盜^ノ草薙劍、逃^テ向^{ユク}新羅^ニ。而中^ニ路風雨、^ニ荒迷^ニ。(而)歸^ル日本紀

雲

天武天皇、避^ニ太政大臣大友皇子之乱^ヲ、將^レ入^ニ東國^ニ。(中略)到^テ大野^ニ以^テ日落^{クレヌ}也。(中略)及^ニ横河^ニ、有^ニ黑雲^ニ。広^サ十余丈^{ワタレリ}經^ニ天^ニ。時^ニ天皇異^ミ之^ヲ。則^{トモイヒ}舉^{ラトリテ}燭親^ヲ乘^レ式占^{フミラ}曰、天下兩分^{ニルノ}之祥也。然^{サカ}朕遂得^ニ天下^ヲ。即急行^{ニアタテ}到^ル伊賀郡^ニ。日本紀

甘露

天武七年、冬十月甲申朔、有^レ物如^レ綿、零^{レリ}於難波^ニ。長五六尺、広七八寸。則隨^{マ、ニ}風^ノ以飄^{ヒル}于松原及葦原^ニ。時人曰、甘露也。日本紀

電

天武八年、六月庚戌朔、氷零^{ズレ}。大如桃子^ノ。日本紀

虹

天武十一年七月^{※ママ}、(中略)殿^ノ内^ニ有^ニ大虹^ニ。壬申、有^ニ物^ニ形如^ニ灌頂幡^ノ、而火色。浮^テ空^ニ流^レ北^ニ。每^ニ国^ノ皆見^ル。或曰、入^ニ越海^ニ。是日、白氣^{シルシ}起^ニ於東山^ニ。其大^サ四围。癸酉、大^ニ地動^{ナイフル}。戊寅、亦地震^{ナイフル}。(動)。是日平旦、有^ニ虹^ニ、当^{レリ}于天中央^ノ、以^テ向^レ日^ニ。日本紀

※八月の誤記。

星

天武十二年、十一月戊申朔(中略)戊辰昏時、七星俱^ニ流^{ママ}東方^ニ。則隕^ツ之。庚午^ノ日没時、星隕^ニ東方^ニ。大如^サ瓮。逮^テ于戊^{イヌトキニ}、天文悉^ク乱^テ。(以)星隕^{ルコト}如^レ雨。是月、有^ニ星^ニ、孛^{ヒコヘリ}于中央^{ナカニ}。与^ニ昴星^ニ双^テ而行之^ク。及^ニ月尽^{ツクモリニ}失^ヌ焉。日本紀

※十三年の誤記。

雷

天慶三年七月廿一日、波夜度毛明神の社、如崩鳴動し(中略)天かき曇、降雨車軸を流し、電光地に布、雷鳴天に響き(中略)遂に如車輪なる雷火、伊賀寿太郎が陣屋

の檐に落て、山のこつく積置ける投松明に烘付〔中略〕
櫓搔楯、一字も不残焼失けり。軍兵とも火を防んと走り
廻りけれども、猛火いよ／＼熾サシにて、雷電尚も止さりけ
れハ、皆おちわな、ひて我も／＼迷惑ふ。純素が役所に
も火うつりければ、無力黒崎へと引退く。〔中略〕賊徒
等黒崎へ到着すると等しく、雨晴雷止けり。不思議とい
ふも愚なり。※太平記

※出典は『前太平記』

風

治承三年五月十二日の午のこくはかり、京中につち風夥
しう吹て、人屋おほくてんたうす。風ハ中御門京極より
おこつて、ひつしさるの方へ吹て行に、棟門平門吹ぬい
て、四五町十町斗ふきもてゆき、桁・長押・柱などハこ
くうにさんざいし、ひハたぶき板の類ハ、冬の木のはの
風にミたる、かごとし。おひた、しうなりとよむ音ハ、
かのちこくのごう風なり共、是にハ過しと見えし。只
舎屋のはそんなるのミならず、命を失者おほし。牛馬の

類数をしらず打ころさる。平家物語

日

建仁二年壬戌正月廿八日、卯、尅大地震。辰、一点朝日
見ル両輪。東鑑

月

治承四年六月九日の日、新都の事はしめ、八月十日の日
上棟、十一月十三日遷幸と定らる。ふるき都ハあれ行と、
今の都ハはんじやうす。あさましかりつる夏もくれて、
秋にもすでに成にけり。秋もやう／＼半になりゆけハ、
ふく原の新都にまし／＼ける人々、名所の月を見んとて、
或ハ源氏の大將の昔の月をしのびつ、すまより明石の
うらつたひ、あハぢのせとをおしわたり、ゑじまが磯の
月を見る。或ハしら浦・吹上・わかかの浦、すみよし・な
には・高砂・をのへの月の明ほのをなかめて（かへる）
人もあり。きう都に残る人々ハ、伏見ひろさハの月を見
る。（其）中にも徳大寺の左大將しつていの卿ハ、ふる
き都の月をこひつ、八月十日あまりに、ふく原よりそ

上り給ふ。何事もミなかはりはて、まれに残る家ハ、門前草ふかく（して）庭上露ふりしけし〔中略〕。今古郷の名残とてハ、かはらの大宮ばかりぞまし／＼ける。大將其所へまゐられけれハ〔中略〕大宮ハ御つれ／＼に〔中略〕御琵琶をあそはされける所へ、大將つと参られたれハ、しはらく御ひはをさしおかせ給ひて〔中略〕夢かや現かや是へ／＼とそ仰ける。源氏のうぢの巻にハ、うハそくの宮の御むすめ、秋の名残を、しミつ、ひはをしらべてよもすから心をすまし給ひしに、有明の月の出るを、猶たへずやおほしけん、ばちにてまねき給ひけんも、今こそ思しそしられけれ。まつよひの小侍従と申女房も、此所に候ハれける。そも／＼此女ほうを待よひとめされける事ハ、ある時御前より、まつよひと帰るあしたといつれかあハれまさる、と仰けれハ、かの女房、待よひの更ゆく鐘のこゑきけハあかぬ別の鳥はものかハ、と申たりけるゆゑにこそ、待よひとめされけれ。大將此女房をよひ出て、昔今の物語し給ひて後、小夜もやう／＼

更ゆけハ、ふるき都のあれゆくを、今やうにこそうたハれけれ。ふるき都をきて見れハあさぢかはらとそあれける、月の光ハくまなくて秋風のミそ身にしむ、とおしかへし／＼三へんうたひ給ひける。平家物語

日

北朝の暦応元年秋八月、後醍醐天皇、第八、宮の今年七歳にならせ給ふを、初冠めさせて、春日少將顯信を輔弼とし、結城入道道忠を衛尉として、奥州へそ下しまゐらせける。〔中略〕兵船五百余艘、宮の御座船を中に立て、遠江の天竜灘を過ける時、海風俄に吹あれて、波浪忽に天を巻翻す。或ハマツ櫓ホシラを折て、弥帆マツにマツて馳る船もあり。或ハ或ハマツ櫓ホシラをかき折て廻流に漂ふ船もあり。〔中略〕宮の召れたる御舟一艘、漫々たる大洋に放れて、既に覆んとしける処に、光明赫奕たる日輪、御船の舳前に現して見えるか、風俄に取て返し、伊勢国神風の浜に吹もとる若干の舟共行方もしらず成ぬるに、此御船はかり日輪の擁護に依て、伊勢国へ吹もとされ給ひぬること只事にあ

らず。何さま此宮繼体の君として、九五の天位を踐せ給ふへき所を（忝も）天照太神の示されける者也とて、忽に奥州の御下向を止られ、則又吉野へ返し入進らせられるに、果して先帝崩御の後、南方の天子の御位をつかせ給ひ、吉野の新帝と申奉りしハ、則此宮の御事也。太

平記

天狗

入道相国〈清盛〉薨せられし頃、ふしきの事あり。〔中略〕六はらの南にあたつて、人ならハ二三十人はかりがこゑして、うれしや水、なるハ滝の水、といふ拍手を出ひてまひおとり、とつとわらふ声しける。去ぬる正月にハ〈治承五年〉上皇〈高倉院〉かくれさせ給ひて、天下諒闇になりぬ。わつか一兩月をへたて、入道相国薨せられぬ。心なきあやしもの者も、いか、うれひさるへき。いかさまこれハ天狗の所為といふさたにて、平家のはやりをの者百よ人、わらふこゑに付てこれをたつぬるに、院の御所法住寺殿にハ、此三ヶ年ハ院もわたらせ給ハす、

月

御所あつかり備前の前司基宗といふ者あり、かのもとむねか相しつたる者共酒をもち来り、あつまりのミけるが、かゝる折ふしに音なせそとのミけるが、次第にのミゑひて、かやうにハ舞おとりけると也。六はらの兵共是を聞付、はつとおしよせ、酒ゑひ共二三十人からめとつて、六波羅へ将て参る。平家物語、盛衰、これに同し。寿永二年、平家ハつくしに都を定め、内裏つくらるへしと公卿せんき有しか共、都もいまだ定らず。主上〈安德〉ハそのころ岩戸の諸卿大蔵の種直か宿所にそましくける。人々の家々ハ野中田中なりけれハ、あさの衣うたね共、十市の里共いつべし。〔中略〕九月十三日夜ハ名をえたる月なれ共、その夜ハ都を思ひ出る泪に、我からくもりてさやかならず。九重の雲の上、久かたの月に思ひをのへしゆふへも、今のやうに思ひ出られて、さつまの守忠度、月を見しこそこのよひの友のミや都に我を思ひ出らん。修理大夫経盛、こひしとよこそこのよひ

のよもすから契し人の思ひ出らん。皇后宮のすけ経政、わきてこしのへの露ともきえすして思ハぬ里の月をみる哉。平家物語

雪 清女捲簾 見人倫門

雷

〔東鑑〕文治三年四月十四日云、雨降雷鳴。霹靂落于政所因幡前司広元^カ、厩之上。馬三疋斃^ル。屋上并柱多以焼訖。而一卷^マ、心経安^{オウ}棟上^ル之處、聊雖^ル焦字^ル、形鮮也。

氣 見謁見部

星

承元四年九月卅日、戊尅、西方天市垣^{シカ}弟三星^ノ、傍^ニ見^ニ奇星。光指^ニ東方、三尺余。芒氣殊盛^{ニシテ}。長一丈許。此星如^ニ本文^ニ者、為^ニ彗星^ニ之由、有^ニ申^ニ之輩^ニ。東鑑

雷

延喜八年六月廿六日、清涼殿^{ヒツサルノ}方柱^ノ上^ノ霹靂^ス。大納言 清貴卿 右中弁 希世朝臣 忽為^ス雷火^ス薨^ス。

※延長八年の誤記。日本紀略か。

除夜 雷

寛喜三年十二月卅日云、今夜、戊亥兩時甚雨、雷鳴。及^ニ深更^ニ、雨休。大晦^ノ夜^ノ、雷鳴、為^ニ殊重變^ニ之由。東鑑

雪

寛喜二年六月十六日、美濃国飛脚參申云、去九日辰尅、当国蒔田庄白雪降^ト。〔中略〕当月白雪降事少^{アレハル}其例^ニ歟。

孝元天皇三十九年六月雪降。其後歷二十六代、推古天皇御宇、三十四年六月大雪降。亦歷二十六代、醍醐天皇御宇、延長八年六月八日大雪降。皆不吉也。今亦經^ニ廿六代^ニ、今月九日雪下。上古猶以為^レ奇、況於^ニ末代^ニ歟。東鑑

霜

寛喜二年七月十六日、霜降^{ルコト}。殆如^ニ冬天^ニ。東鑑

天狗

天福二年三月十日云、去二月比、南都^ニ天狗現怪^{シテ}、一夜中^ニ於^ニ人家^ニ、千余字書^ニ三字^ニ。未來不^ト云云。非^ニ短慮之所^ニ覃^{コト}、尤為^ニ奇怪^ニ。東鑑

飢饉

寛喜四年十一月十三日云、依飢饉、可救貧弊民之由、
武州泰時被仰之間、矢田六郎左衛門尉、既下行九千
余石米訖。而伴輩、今年無據于弁償之旨、又愁申
之。可相待明年糺返之趣、重被仰矢田。凡去今年
飢饉、武州被廻撫民術之余、美濃国高城西郡、大久
礼以上、千余町之乃貢、被停進濟之儀。遣平出左衛
門尉春近・兵衛尉等、於当国於株河、被施于往
返浪人等。於尋緣辺上下向輩者、勘行程、日数、
与旅粮。至称可止住由之族者、預置于此庄園
之間、百姓被扶之。東鑑

日

嘉禎四年閏二月十三日、午尅、日有重暈。東鑑

雪

宝治二年六月十八日云、鎌倉濫橋辺一許町以下、南雪降。
其如霜。東鑑

雪 氷室ノ部ニ入ヘシ

建長三年六月五日云、有評定、此事〔中略〕当炎暑之
節者、召寄富士山之雪所、為備珍物也。彼是以
無民庶之煩休。被止之、善政隨一。東鑑

雷

弘長三年九月十二日云、終夜甚雨、戌刻雷鳴。武藏大路
鎌倉霹靂、蹴裂率都婆。其上三尺余、為雷火焼。蹴
裂之響声、人屋聞者甚多。東鑑

雨

文永三年二月一日云、雨降。晚泥交雨降。希代怪異也。
粗考旧記、垂仁天皇十五年丙午、星如雨降。聖武天皇
御宇、天平十三年辛巳六月戊寅、日夜洛中飯下。同十四
年壬午十一月、陸奥国丹雪降。光仁天皇御宇、宝龜七
年丙辰九月廿日、石瓦如雨自天降。同八年、雨不降
井水断。東鑑

電

文永三年三月五日云、午尅、雷鳴自南方亘北。降
電、大如李。東鑑

星 天狗

アル夜一献ノ有ケルニ、相摸入道数盃ヲ傾ケ、酔ニ和シテ立テ舞事良久シ。若輩ノ興ヲ勸ル舞ニテモナシ。又狂者ノ言ヲ巧ニスル戯ニモ非ス。四十有余ノ古入道、酔狂ノ余ニ舞フ舞ナレハ、風情可^レ有共覺サリケル処ニ、何クヨリ来トモ知ヌ、新座・本座ノ田楽共十余人、忽然(ト)シテ坐席ニ列テソ舞歌ヒケル。其興甚尋常ニ越タリ。暫有テ拍子ヲ替^(マ)替^(マ)舞(フ)声ヲ聞ケハ、天王寺ノ(ヤ)ヨウレイホシヲ見ハヤトソ拍子ケル。或官女此声ヲ聞テ、余ノ面白サニ障子ノ障ヨリ是ヲ見ルニ、新座・本座ノ田楽共ト見エツル者ハ一人モ人ニテハ無リケリ。或ハ鶯^{カチハシカ}勾テ鶯ノ如クナルモアリ、或ハ身ニ翅在テ其形山伏ノ如クナルモアリ。異類異形ノ媚者^へ共力姿ヲ人ニ変シタルニテソ有ケル。官女是ヲ見テ余リニ不思議ニ覺ケレハ、人ヲ走ラカシテ城入道ニソ告タリケル。入道取物モ取敢ズ、太刀ヲ取テ其酒宴ノ席ニ臨。中門ヲ荒ラカニ歩ケル^{アシオト}登ヲ聞、化者ハ搔消様ニ失セ、相摸入道ハ前

翻刻「故事部類抄」(二)——曲亭叢書——

後モ不^レ知酔伏タリ。燈ヲ挑サセテ遊宴ノ座席ヲ見ルニ、誠ニ天狗ノ集リケルヨト覺テ、蹈汚シタル畳ノ上ニ禽獸ノ足跡多シ。城入道、暫ク虚空ヲ睨テ立タレトモ、敢テ眼ニ遮ル者(モ)ナシ。良久シテ、相摸入道驚覺テ起タレトモ、惘然トシテ更ニ所^レ知ナシ。後日ニ南家ノ儒者刑部少輔仲範、此事ヲ伝聞、天下將^レ乱時、妖靈星ト云惡星下テ災ヲ成ト云ヘリ。而モ天王寺ハ(是)法^(マ)法最初ノ靈地ニテ、聖德太子自ラ日本一州ノ未來記ヲ留給ヘリ。サレハ彼媚者^へカ天王寺ノ妖靈星ト歌ケルコソ怪ケレ。如何様天王寺辺ヨリ天下ノ動乱出来テ、国家敗亡シヌト覺ユ。哀国主德ヲ治メ、武家仁ヲ施シテ消^レ妖謀ヲ被^レ致ヨカシト云ケルカ、果シテ思知ル、世ニ成ニケリ。太平記

橇 雪ノ部ニ入ル

太平記卷之十八、北国合戦ノ記ニ云、去程ニ、十一月廿三日(延元元年)寄手六千余騎、深雪ニ橇ヲモ懸ス、山路八里ヲ一日ニ越テ、湯尾宿ニソ著タリケル。(中略)

又云、五尺余降積タル雪ノ上ニ櫓モ不_レ懸シテ走出タ
レハ、胸ノ辺迄落入テ、是ヲ拔ントスレ共不_レ叶。
只泥ニ粘タル魚ノ如ニテ、被_二生虜_一者三百余人、
被_レ討者ハ数ヲ不_レ知。希有ニシテ逃延タル人モ、皆物
具ヲ捨、弓箭ヲ失ハヌ者ハ無リケリ。〔中略〕又云、正
月十一日〔延元二年〕〔中略〕里見伊賀守ヲ大将トシテ、
義治五千人ヲ金崎ノ後攻ノ為ニ敦賀ヘ被_二差向_一。
其勢皆吹雪ノ用意ヲシテ、物具ノ上ニ蓑笠ヲ著、蹈組_{（マヤギ）}
ノ上ニ櫓ヲ履テ、山路八里カ間ノ雪蹈分テ、其日葉_{（マヤギ）}
原マテ寄タリケル。

天狗

貞和ノ比、仁和寺ニ一ノ不思議アリ。往来ノ禪僧、嵯峨
ヨリ京ヘ返ケルカ、夕立ニ逢テ可_二立寄_一方モ無リケ
レハ、仁和寺ノ六本杉ノ木陰ニテ、雨ノ晴間ヲ待_{（居）}
タリケルカ、角テ日已ニ暮ニケレハ行前恐シクテ、ヨシ
サラハ、今夜ハ御堂ノ傍ニテモ明セカシト思テ、本堂ノ
縁ニ寄居ツ、閑ニ念誦シテ心ヲ澄シタル処ニ、夜痛ク

深テ月清明タルニ見レハ、愛宕ノ山比叡ノ嶽ノ方ヨリ、
四方輿ニ乗ケル者、虚空ニ集テ、此六本杉ノ梢ニソ並居
タル。座定テ後、虚空ニ引タル幔ヲ、風ノ颯ト吹上タル
ニ、座中ノ人々ヲ見レハ、上座ニ先帝ノ御外戚、峯ノ僧
正春雅、香ノ衣ニ袈裟カケテ、眼ハ如_二日月_一光リ渡
リ、鬚長シテ鳶ノ如ナルカ、水精ノ珠数爪操テ坐シ給ヘ
リ。其次ニ南都ノ智教上人、浄土寺ノ忠円僧正、左右ニ
著座シ給ヘリ。皆古ヘ見奉シ形ニテハ有ナカラ、眼ノ光
リ_{（尋）}常ニ替テ、左右ノ脇ヨリ長翅生出タリ。往来ノ
僧是ヲ見テ、怪シヤ我天狗道ニ落ヌルカ、将天狗ノ我眼
ニ遮ルカ_{（ハ）}ト、肝心モ身ニソハデ、日モハナタ
ズ守リ居タル程ニ、又空中ヨリ五緒ノ車ノ鮮ナルニ乗テ
来ル客アリ。榻ヲ踐テ下ルヲ見レハ、兵部卿親王ノ未法
体ニテ御座有シ御貌也。先ニ座シテ待奉ル天狗共、皆席
ヲ去テ蹲踞ス。暫有テ坊官カト覺シキ者一人、銀ノ銚子
ニ金ノ盃ヲ取副テ御酌ニ立タリ。大塔宮御盃ヲ召レテ、
左右ニ屹ト礼有テ、三度聞召テ閣セ給ヘハ、峯僧正以下

ノ人々次第二飲流シテ、サシモ興アル氣色モナシ。良遙
ニ有テ、同時ニワツト喚ク声シケルカ、手ヲ挙テ足ヲ
(引)カ、メ、頭ヨリ黒烟燃出テ、悶絶僻地スル事半時
許有テ、皆火ニ入ル夏ノ虫ノ如クニテ、焦レ死ニコソ死
ケレ。穴恐シヤ、是ナメリ、天狗道ノ苦患ニ熱鉄ノマロ
カシヲ日ニ三度吞ナル事ハト思テ見居タレハ、二時計有
テ、皆生(出)給ヘリ。太平記廿五

夏雪

康安元年六月二十二日、俄ニ天搖曇雪降テ、氷寒ノ甚キ
事、冬至ノ前後ノ如シ。酒ヲ飲テ身ヲ暖メ、火ヲ燒爐ヲ
囲ム人ハ、自寒ヲ防ク便リモアリケリ。山路ノ樵夫、野
徑ノ旅人、牧馬、林鹿、悉ク氷ニ被レ閉、雪ニ臥テ、
凍死ル者數ヲ不レ知。太平記三十六

雨 山吹の歌 花卉ノ部ニアリ

雨

和泉式部しのびて稲荷へ参けるに、田中明神のほとりに
て時雨のしけるに、いか、すへきと思ひけるに、田かり

翻刻「故事部類抄」(二)——曲亭叢書——

けるわらハの、襖アサといふものをかりてきて参にけり。下
向の程にはれにけれハ、此襖をかへしとらせてけり。さ
て次の日、式部はしの方を見いだしてゐたりけるに、大
きやかなる童の、文持てた、すみけれハ、あれハ何者そ
といへハ、此文まいらせ候ハんといひて、さしおきたる
を、ひろけて見れハ、時雨する稲荷の山の紅葉々ハあを
かりしより思ひそめてき、と書たりけり。式部あはれに
おもひて、此童をよびて、おくへといひて、よひいれけ
るとなん。古今著聞集

雩

寛仁二年六月旱。勅仁海僧正、或号小野於神泉苑修
請雨經法。大雨下三日夜、長元之五、長久之四、凡
詔雩九度、皆降雨。以先長暦二年(二)為僧正。時
人呼雨僧正(二)。元亨釈書

雪

白河院、深雪のあした、雪見の御幸有べしとて、御供の
人少々めさる、事、ほのきこえし程に、やがて出御有て、

面白き雪かな、何方へかむかふべき、小野の皇太后宮の
もとへむかハヤと、仰られけるを、御隨身承りて、従
者を馬にのせて、彼宮へはせまゐらせて、かゝる事侍り、
すでに御車奉りて候也、御用意候へしと申たりけれハ、
紅のきぬ五具有けるを、せばりにふつときりて、寝殿十
間になんわたされたりける。ミつからいりて御らんする
事もあらはいか、と申人有ければ、皇太后宮、雪見る
人ハ内へいる事なし、とてさハぎたるミけしきなくてな
んおはしましける。御幸なりて、御車やり入て、はしが
くしのもとにさしよせておはしましけれハ、ミきをなん
す、め奉られける。朽葉のかざみきたる童二人、一人ハ
沈のおしきに玉の盃、銀シロカネのさらに金コカネの立花一ふさお
かれたるを持たりけり。一人ハ片口の銚子に酒サケを入れて
持たり。二人の童、寝殿のまへをへて、はしのこをな
めにおりくだりて、御車へ参りけるさま、いミしく優に
なんミえ侍る。酒ミキハうるハしうならせ給（マツル）ふける。橘ハ季
通御供に侍けるに給ハせけり。上皇かへらせおはしまし

けるまゝに、ゆかしくなつかしき世にておはしけれとて、
庄一所まいらせられたりけれハ、只今御幸なるよしつげ
まいらせたりける御隨身になんあつけ給ひける。古今著
聞集

天

寛和二年六月二十二日夜、帝与三式部丞藤原道兼・沙門
厳久一、潜出レ宮路過ニ晴明宅。晴明適避ニ暑于庭、仰
見驚云、天象呈レ異、天子避レ位、何其怪哉。帝
聞レ之、急走入ニ花山寺ニ薙髮。晴明即入レ宮奏事、
帝不レ在焉。拾芥抄云、或記云、偉驍門元者玄武門也、
俗号ニ之不開門。或人云、花山院御出家之時、自ニ此門
令レ出。其後不レ被レ開歟。

※前半は元亨釈書か。

卯花くたし

四五月の頃、雨しはく降ん。これを卯の花くたしとい
ふ。基俊朝臣歌にいと、しくしつかふせやのいふせき
に卯の花くたし五月雨そふる。

地部 (元表紙二)

水神

伊弉冉尊、其且^{スル}神退^{サリマサント}之一^一時、則生^ム水神罔象女^{ミツノミツノメ}及
土神埴山姫^{ツチノハニ}、又生^{ノヨサクラマ}(三)天吉葛^一。日本紀

磐

伊弉^{イサ}(諾)尊、(已)至^{マスモツ}泉津平坂^ニ。故便^チ以^テ千人所
引^{ノイハ}磐石^ヲ、塞^{フセチ}其坂路^ヲ、与^ト伊弉冉尊^ニ相向^ヒ而立^テ、遂建^{ニワタル}
絶妻之誓^ヲ。日本紀

川

伊弉諾尊、已到^{リマス}泉津平坂^ニ。一云、伊弉諾^ニ(尊)、乃
向^{テオホキニ}大樹^ハ放屁^{リマス}。此即^{チナ}化^{ルオホト}成^{ヨモツヒ}巨川^ニ。泉津日狭女^ヲ、将^{スル}
渡^{ント}其水^ヲ之間、伊弉諾^ニ(尊)、已至^ニ泉津平坂^ニ。日本
紀

紀

入海得鈎^{チヲ} 見釣者門

津

天皇、引^{テミイクサ}軍^ヲ還^{玉フ}。虜亦不^{テセウ}敢^{ヲウ}逼^テ。(却)至^テ草香津^ニ、

植^{タテ}盾而^レ(為)^ニ雄詔^{ヲタク}(一)焉。因改号^テ其津^ヲ曰^フ盾津^ト。
今云^ハ蓼津^ト訛^{レリ}也。神武紀

海 風濤難

天皇^ニ(神武)、越^{テサ}狹野^ヲ、(而)到^{マス}熊野神邑^{ノノムラ}、且^{シハラ}登^テ
天磐盾^ニ。仍引^テ軍^ヲ漸進^ニ。海中^ニ卒遇^ニ暴風^ニ。皇舟
漂蕩^ニ。時稻飯命^{ニイナヒ}乃歎^テ曰、嗟乎^ア、吾祖^{カミヤハ}則天神^ニ、母則
海神^ニ。如何^ニ厄^ニ我^ヲ於陸^ニ、復厄^ニ我^ヲ於海^ニ乎。
言訖^テ、乃拔劍^テ入海^ニ、化^ニ為^ル鋤持神^ニ。三毛入野命、
亦恨^テ之^ヲ曰、我母及姨^{ヒオハ}並^ニ是海神^ニ。何為^ニ起^ニ波瀾^ニ、以灌^{オホ}
溺^ニ乎^ヲ。則踏^{イデ}浪秀^ニ、而往^{イデ}乎^ニ常世鄉^ニ矣。天皇独^{ヒト}
与^ト皇子手研耳命^ニ、師^テ軍^ヲ而進^ニ、至^マ熊野荒坂津^ニ。神武
紀

山

崇神天皇十年、復遣^{タマシテ}大彦与和珥臣^{トワテオムノツ}遠祖彦国尊^ヲ、
向^{オモキテ}山背^ニ擊^{シメエフ}埴安彦^{ハニヤス}。(中略)則率^テ精兵^ヲ進登^テ
那羅山^ニ而軍^ニ之^ヲ。(時)官軍屯聚^ミ、而躋^{フミ}阻草木^ヲ。
因以号^テ其山^ヲ曰^フ那羅山^ト。日本紀

川

崇神天皇十年、復遣^{マタシテ}大彦与^ト〔中略〕彦国葦^{フクラ}〔中略〕
擊^{シメユフ}埴安彦^{ニヤス}〔中略〕則官軍〔中略〕進^テ到^ニ輪韓河^{ワタカハ}、
(与)〔中略〕埴安彦〔中略〕挾^{イハミテ}河屯^ニ之、各相挑焉。故時人改^テ
号^テ其河^ヲ、曰^{イハト}挑河。今謂^ハ泉河^ト訛^{レリ}也。日本紀

石

天皇〔初〕將^{シユフサント}討賊^ヲ、次^ニ于柏峽^{カシハラノ}大野^ニ。其野有^ニ石^ニ。
長六尺、広三尺、厚^{サヒト}一尺五寸。天皇祈^{ウケイデ}之曰、朕^レ
得^ホホシエン^トオハ^ハ減^ニ土蜘蛛^ヲ者、將^ニ蹶^フ茲^ノ石^ヲ、如^テ柏葉^{ハハラノ}而^レ
拳^{レトノ}焉。因蹶^{テフミユフ}之。則如^リ柏上^ノ於大虚^{ソラニ}。故号^{レテ}其
石^ヲ、曰^{フミト}蹈石^ト也。景行紀

泉

十八年春三月、天皇〔中略〕巡^{メクリミ}狩^リ筑紫^ノ國。〔中略〕夏
四月〔中略〕壬申、自^{ウツチ}海路^{マリテ}泊^ニ於葦北^ノ小嶋^ニ而進食^シ。
時召^{ニテ}山部阿珥古^{アシコ}之祖小左^{オヤヲヒタリ}、令^ラ進^ミ冷水^{ササキミモサヲ}。適^テ是^ニ
時、嶋中無^ニ水。不知^{セズベ}〔中略〕所為^ニ。則仰^テ之祈^ニ。于天神^{ツツ}
地祇^ニ。忽寒泉^{チニシヅ}從^リ崖^ノ傍^ニ涌出^ツ。乃酌^{チテ}以獻^ル焉。故以^{レテ}

号^テ其嶋^ヲ曰^フ水嶋^ト也。景行紀

海 風濤難

日本武尊〔中略〕進^{イデマシテ}相模^ニ、欲^{ホス}往^{ミタケムト}上総^ニ。望^{オセリテ}海高^{ヲコト}
言^フ曰、是小^レ海耳^ニ。可^{タチハリ}立跳^{ハリニモツ}渡^ニ。乃至^ニ〔中略〕海中^ノ、
暴風忽^ニ起^テ、王船漂蕩^{ミフネカ、ヨヒ}、而不可^レ渡^ニ。時有^ニ從^{ミツル}王^ニ
之妾^{ヨムナメ}。曰^ハ弟橘媛^ト。穗積氏忍山宿禰之女也。啓^テ王曰、
今風起浪溢^{ヨキハヤクシテ}、王船欲^{フネス}沒^{シツクミナント}。是必^ハ海神^{ワタツミノ}心也。願^ハ
以^{マコ}〔中略〕賤^{ヤツコカ}妾之身^ヲ、贖^{アカナヒテ}王之命^ヲ。而入^{オホシノチニ}海^ニ。言訖^テ乃^レ
披^{オシヒキテ}瀾^ヲ入^マ之。暴風即止^{アカシマカセ}。船得^{ミツネ}著^ニ岸^ニ。故時人号^テ
其海^ヲ曰^{ハシルミツト}馳水^ト也。景行紀

山

日本武尊、進^{イデマシ}入^ニ信濃^ニ。是國也、山高^ク谷幽^{フカクシテ}、翠嶺^{アヲキク}
万重^{ナツヘナリ}。〔中略〕馬頓輿^{ナツミテ}而不進^{ユカ}。然^{トモ}日本武尊、被^ワ火烟^キ
凌霧^テ、遙徑^ニ大山^ニ。既逮^ニ于峰^ニ、而飢^{ツカレユフ}之。食^ミ於^ニ
山中^ノ。山神令^{ナヤマシ}〔中略〕苦^シ王^ヲ、以化^{ナリテ}白鹿^キ立^{テリ}於王^{ミコ}
前^ニ。王異^{アヤ}之、以一箇蒜^{ツノヒルヲ}彈^ハ之。白鹿^ニ則中^{リテ}眼而
殺之。爰王忽失^ニ道^ヲ、不知^レ所出^ニ。時白狗自^ニ

来^{リテ}、有^ニ導^{ミテ}、王^{ヒキツル}之^ノ状^ヲ。随^テ狗^ニ而^レ行^ク之^ヲ、得^ル出^{コトヲ}。美濃^ニ日本紀

泉 ○蛇門

近江胆吹山^ニ有^ニ荒^{アラ}神^{フル}。日本武尊、自^ニ尾張^ニ（中略）徒^{カチヨリ}行^{イテ}之^ヲ。至^ニ胆吹山^ニ、々^ノ神化^ニ大蛇^ニ当^レ道^ニ。爰^ニ日本武尊、不^レ知^ニ主神^ニ化蛇^ニ之^ヲ。謂^フ、是大蛇^ハ必^ズ荒^ス神^ノ之^ノ使^ヲ也。既^ニ得^レ殺^ス主神^ニ其使^者者^ハ豈^ニ足^レ求^フ乎。因^テ跨^テ蛇^ヲ猶^ニ行^ク。時^ニ山^ノ神^ノ之^ノ興^キ雲^ヲ零^{ラシ}水^ヲ。峰^ニ霧^ヲ谷^ニ噫^ク無^レ復^タ可^ク行^ク之^ノ路^ヲ乃^シ棲^シ邊^ニ不^レ知^ニ其^ノ所^ヲ。然^{トモ}凌^キ霧^ヲ強^ク行^ク。方^ニ僅^ニ得^レ出^ル。猶^ニ失^フ意^ヲ如^シ醉^シ。因^テ居^ニ山^ノ下^ノ之^ノ泉^ニ側^ニ乃^シ飲^ミ其^ノ水^ヲ而^レ醒^シ之^ヲ。故^ニ号^フ其^ノ泉^ヲ曰^フ、曰^フ居醒泉^ニ也。日本紀

池

誉田天皇七年秋九月、高麗人・百濟人・任那人・新羅人並^ニ来^リ朝^リ。時^ニ命^{ジテ}武内宿禰^ヲ領^リ諸^ノ韓^ノ人^ヲ等^ヲ作^シ池^ヲ。因^テ以^テ、名^ヲ池^ヲ号^フ韓^ノ人^ノ池^ニ。應神紀

氷室

大鷦鷯天皇六十二年、額田大中彦皇子、獵^ニ于^ニ關^{ツケ}鷯^ニ。時^ニ皇子^ニ自^ニ山上^ニ望^ミ之^ヲ、瞻^ミ野^ノ中^ニ有^ニ物^ヲ。其形如^シ鷹^ニ。仍^レ遣^フ使^ヲ者^ヲ令^リ視^ス。還^リ来^リ之^ヲ曰^フ、窟^ニ也。因^テ喚^ミ關^ノ鷯^ヲ置^キ大山^ニ主^ヲ問^フ之^ヲ曰^フ、有^ニ其^ノ野^ノ中^ニ者^ヲ何^ヲ窟^ニ矣。啓^テ

之^ヲ曰^フ、氷室也。皇子曰、其藏^ル如何^ニ。亦^ニ笑^フ用^フ焉^ヲ。曰^フ、掘^ル土^ヲ丈^ニ余^ヲ。以^テ草^ヲ蓋^フ其^ノ上^ニ。敦^ク數^ニ茅^ヲ荻^ヲ取^リ氷^ヲ以^テ置^キ其^ノ上^ニ。既^ニ經^ニ夏^ニ月^ニ而^レ不^レ泮^キ。其用^ニ之^ヲ、即^ニ当^ニ熱^ニ月^ニ漬^キ水^ヲ酒^ニ以^テ用^フ也。皇子則^ニ將^ニ来^ニ其^ノ水^ヲ獻^ス于^ニ御^ニ所^ニ。天皇歡^ミ之^ヲ。自^ニ是^ニ以^テ後^ニ、每^ニ当^ニ季^ニ冬^ニ必^ズ藏^ス氷^ヲ至^ニ春^ニ分^ニ始^ニ散^ス氷^ヲ也。仁德紀

地震

推古天皇七年夏四月、（中略）地動^ニ舍屋悉^ク破^{コホ}。則^レ令^リ四方^ニ俾^シ祭^ス地震^ノ神^ニ。日本紀

※七年の誤記。

仮山

推古天皇二十年、自^ニ百濟^ニ有^ニ化^ヲ来^リ者^ヲ。其面^ヲ身^ヲ皆^ク班^ニ白^ニ。若^シ有^ニ白^ニ癩^ニ者^ヲ乎。惡^シ其^ノ異^ヲ於^ニ人^ニ欲^ス棄^ン海^ニ

中嶋^ニ然^ヨ其人^ノ曰、若^シ惡^ハ臣^カ之班皮^ヲ者、白班^ロ牛^マ馬^モ、不^レ可^レ畜^ニ於^ノ国^ノ中^ニ。亦^サ臣^コ有^ニ小^イオ^カ。能^レ構^ニ山岳^ノ之形^ノ。其^レ留^テ臣^ヲ而^ハ用^ハ、則^レ為^ニ国^ノ有^ニ利^ニ。何^ノ空^ク之棄^ニ海島^ニ耶。於是^コ、聽^ニ其辭^ヲ以^テ不^レ棄^ニ。仍^レ令^ニ構^ニ須弥山^ノ形及^ニ吳橋^ヲ於^ニ南庭^ニ。時人^ノ号^ニ其^ノ人^ヲ曰^フ路子工^ノ。亦^ナ名^ニ芝耆^マ摩^ロ呂^ト。日本紀

水怪

推古天皇二十七年夏四月、〔中略〕近江国言^ス於^ニ蒲生河^ニ有^ニ物^ヲ。其形^ノ如^シ人^ノ。秋七月、撰津国有^ニ漁夫^{アマ}、沈^ニ罟^ヲ於^ニ堀江^ニ。有^ニ物^ヲ入^ル罟^ニ。其形^ノ如^シ児^ヲ。非^ニ魚^{ニモ}、非^ニ人^{ニモ}、不^レ知^レ所^ヲ名^ン。日本紀

火山

推古天皇二十八年冬十月、以^ニ砂礫^{ザレシヲ}葺^ク檜隈陵^ノ上^ニ。則^レ域^ヲ外^ニ積^ニ土^ヲ成^ニ山^ヲ。仍^レ每^ニ氏科^{オホセテ}之^ヲ、建^ニ大^{ナル}柱^ヲ於^ニ土^ノ山^ノ上^ニ。時^ニ倭^ノ漢^ノ坂^ノ上^ニ直^ニ樹^ニ柱^ヲ、勝^ニ之^ヲ大^マ高^シ。故^レ時人^ノ号^ニ之^ヲ曰^フ大^マ柱^ヲ直^ニ也。日本紀

温泉

〔ママ〕
広額天皇三年秋九月丁巳朔乙亥、幸^ニ于^ニ撰津国^ノ有^ニ間温湯^ヲ。冬十二月丙戌朔戊戌、天皇至^ニ白^ニ温湯^ヲ。舒明紀。十年冬十月、復^ニ幸^ニ有^ニ間温湯宮^ヲ。同上

水怪

皇極天皇二年八月、〔中略〕茨田池、水、変^カ如^シ藍汁^ニ。死^{タル}虫^ヲ覆^レ水^ヲ。溝瀆^{ウチキ}之流^{ミツ}、亦^サ復^コ凝^ホ結^ホ。厚^{サミ}三四寸^{キハカリ}。大小^ノ魚^ノ臭^{クサレタル}如^シ夏^タ爛^タ死^レ。由^ニ是^ヲ、不^レ中^ニ喫^フ焉。〔中略〕至^ニ九月^ニ、池、水、漸^ク〔ママ〕変^カ成^ニ白^ニ色^ニ。亦^ナ無^ク臭^{クサキ}氣^カ。日本紀

地震

天武七年十二月、筑紫国大^ニ地動^テ之^ヲ。地裂^ル。広^ニ二丈^ニ、長^ニ三千余丈^ニ。百姓^{ヤカス}舍屋^ヲ、每^ニ村^ノ多^ク仆^ク壊^レ。是^ノ時^ニ、百姓^ノ一家^ノ有^ニ岡^ノ上^ニ。当^ニ于^ニ地動^ニ夕^ニ、以^テ岡^ヲ崩^レ処^ニ遷^ル。然^{トモ}家^ノ既^{シテ}全^シ、而^ナ無^ク破^ヤ壊^{コト}。家^ノ人^ノ不^レ知^ニ岡^ノ崩^ノ家^ノ避^{コトヲ}。但^ニ会^ニ明^ニ後^ニ、知^テ以^テ大^ニ驚^ク焉。日本紀

地震

〔ママ〕
天武十二年冬十月己卯朔〔中略〕壬辰、逮^テ于^ニ人定^キ、大^ニ

地震。挙レ国男女叫唱、不^レ知^ニ東西。則山崩、河涌、諸国郡官舎、及百姓倉屋、寺塔神社、破壞、之類、不可勝数。由是、人民及六畜、多死傷^{（之）}。時伊予温泉、没^レ而不^レ出。土左国田苑五十余万頃、没^レ為^レ海。古老曰、若是地動、未曾有也。是夕、有^ニ鳴声^一如鼓、聞^ニ于東方^一。有^レ人曰、伊豆嶋、西北、二面、自然增益、三百余丈。更^ニ為^ニ一嶋^一。則如^{（之）}鼓音者、神造^ニ是嶋^一響也。日本紀

※十三年の誤記。

醴泉

持統——七年十一月丙戌朔〔中略〕己亥、遣^ニ沙門法員^一善往、真義等^ニ試飲^ニ（服）^一近江国益須郡醴泉。〔中略〕八年春三月甲申朔〔中略〕己亥、詔曰、粵^ニ以七^一年歲次癸巳、醴泉涌^ニ於近江^一〔国〕益須郡都賀山。諸疾病^{（人）}、停^ニ宿^一益須寺、而療^ニ差者衆^一。故入^ニ水^一田四町、布六十端、原^ニ除^一益須郡今年調役、雜徭。国司頭至^ニ目^一、進^ニ位一階^一。賜^ニ其初驗^一醴泉者、

葛野羽衝・百濟土羅々女、人^{（ヒト）}絶二匹・布十端・鍬十口。日本紀

泉

天喜五年六月五日、賴義父子、鎮守府を立て衣川へと発向ある。阿倍頼時、これを聞て、弟、僧良昭に四千余騎を相添て、同七日途中に於て挑戦しむ。〔中略〕この三十余日、雨降らざりけれハ、深田も畔となりて、常に絶さる谷水も、天公雨露を下さねハ、一点の滴なく〔中略〕將軍の軍中水を求かね、己か疵より出る血を吸ひ、流る、汗にて唇をうるほし〔中略〕敵の近付かぬを幸として、暫く息つき居たりける。斯てハ剛敵に当ん事、いかにもかなふへうもあらず。將軍遙に本国の方をふし拝ミ、至信に祈念し給ひけるハ、伝聞、後漢の貳師將軍ハ、武帝の勅を受けて夷賊ヲ責しに、陣中水つきて、渴にのそミける時、劍を抜て岩石を刺けれハ、飛泉忽涌出て万卒渴を資しとかや。今臣賴義朝敵を責て、聊勝利あるに似たれとも、三軍渴に臨て如何ともする事なし。当今（後冷

泉院の聖徳、何ぞ漢王の徳に不如や。臣か忠義、寧式

師將の忠に比することなからんや。帰命頂礼、通法救世
大士、擁護の手を垂給へ、としばらく〔中略〕礼拝恭敬
あり、ミつから弓弮を以て岸を穿給ひしかハ、真に大悲
の感応にや、燃るがことき岩廉より澧水俄に涌出て、
涓々として流れける。〔中略〕此水の流れ、加美川に落入
けれハ、此所を北加美川と名付く。されハ朝敵ことく
く伏誅の後、こ、に一字の梵宇を建て、新通法寺と号ケ、
八幡太郎殿の髪中に被り給ひし観音の小像を安置し給ひ
けり。前太平記

谷

東山〔中略〕鹿か谷といふ所ハ、うしろハ三井寺につ、
いてゆゝしき城郭にてそ有ける。それに俊寛僧都の山庄
有。かれにつねハ寄合く、平家ほろほすへきはかりご
とをめぐらしける。平家物語。談合谷ハ是則世俗、称号。

在鹿谷上二町余。左_リ上_ル所_ツ峙_{タチ}奇岩、眺望絶景也。古
へ此所法勝寺執行俊寛山庄也。山州名跡志

河

足利又太郎忠綱〔依藤太秀郷十代、下野国住人足利太郎
利綱か子、時十六歳〕宇治川の先かけして、平等院の門
の内へせめ入く戦けれバ、大將軍左兵衛督知盛、是を
見給ひて、渡せくとげちし給へハ、二万八千よき、ミ
な打入て渡す。さばかりはやきうぢ川も、馬や人にせか
れて、水ハ上にそた、へける。さう人はらハ、馬の下手
に取付く渡る程に、膝より上をぬらさぬものもおほ
（か）りけり。おのつからはづる、水にハ、何もたまら
ず流たり。爰にいかいせ両国の官兵等、馬いかた押しや
ふられて、六百よきこそなかれたれ。〔中略〕其中にひを
としのよろひきたるむしや三人、あしろに流れかゝりて
うきぬしつミぬゆられけるを、伊豆守仲綱見給ひ、かく
こそ詠し給ひけれ、いせむしやハミなひをとしの鎧きて
宇治の網代にかゝりける哉。是等ハ皆いせの国の住人也。
平
黒田後平四郎、ひの、十郎、乙部の弥七といふ者也。平
家物語

浦 東鑑作桂浦

九郎大夫判官義経、二月十七日（元暦二年）に阿波の地へおしわたつて、生捕の兵近藤六近家を召て、爰をハ何といふぞ、と問給へハ、かつうらと申候。判官笑て、色代など宣へハ、一定かつうら候。下郎の申やすきま、に、かつらとハ申せ共、文字にハ勝浦と書て候と申けれハ、判官なのめならず悦給ひて、あれ聞給へ、殿原。軍にむかふ義経か勝浦に付めてたよき。若此辺に平家の後矢射つへき仁ハたれか有、と宣へハ、阿波の民都重能か弟、桜庭の介能遠とて候、と申す。いざ、らハけちらして通らん、とて近藤六か勢百き斗か中より、馬や人をすぐつて三十き斗我勢にこそ俱せられけれ。平家物語

石 勇力ノ部ニモ入ヘシ

東鑑 建久三年八月十一日、静玄（カサツ）阿波阿闍梨静空弟子立ニ堂前、（二階堂也）池石（ニツ）將軍家頼朝自ニ昨日御逗留行政宅。為レ覽ニ此事也。汀野埋石、金沼、汀野筋、鴉合（カラスアヒ）石嶋等石、悉以今日立ニ終之。至ニ沼石并形

石等者、一丈許也。以ニ静玄（カサツ）訓ニ畠山次郎重忠一人捧ニ持之、渡ニ行池中心、立ニ置之。観者莫レ不レ感ニ其力。

※九月十一日の誤記。

山洞

建仁三年六月一日、將軍家頼朝著御伊豆奥、狩倉（ニ）而号ニ伊東崎之山中有ニ大洞。不レ知其源遠。將軍怪レ之、已尅、遣ニ和田平太胤長、披見レ之。胤長拳火入ニ彼穴。酉尅帰參。申云、此穴行程数十里、暗兮不レ見ニ日光。有ニ一、大蛇、擬レ吞ニ胤長之間、拔劍斬殺訖。東鑑

山

建仁三年六月三日、將軍家頼朝渡ニ御于駿河国富士、狩倉。彼山麓又有ニ大谷（ナル）（ノ）之穴。為レ令レ究ニ見其所、被レ入ニ仁田四郎忠常（ツ）主従六人。忠常賜ニ御劍一重宝入ニ穴。今日不レ帰ニ出幕下（マ）（マ）。同四日、記云、已尅、仁田四郎忠常出ニ穴、帰參。往還経ニ一日一夜也。此洞狭兮不レ能レ廻レ踵、不ニ意、進行。又暗兮令レ痛ニ

心神。主從各取_二松明_一、路次、始中（終）、水流浸_レ足、蝙蝠遮_二飛于顔_一、不_レ知_二幾千萬_一。其先途、大河也。波浪漲_レ流、失_レ據_二于欲_一渡。只迷惑之外無_レ他。爰當_二火光河_一、向_二見_一奇特之間、郎從四人忽死亡。而忠常依_二彼靈之訓_一、投_二入恩賜御劍_一、於_二件河_一、全_レ命帰參。古老云、是淺間大菩薩御在所、往昔、以降、敢不_レ得_レ見_二其所_一。今次第尤可_レ恐乎。東鑑

海

建保四年正月十五日、相模国江嶋明神有_二託宣_一。大海忽變_二道路_一。仍參詣之人無_二船之煩_一。始（自）_二鎌倉國中_一、縋素上下成_レ群。誠以末代、希有神變也。三浦左衛門尉（義村）、為_二御使_一向_二其靈地_一令_レ參。嚴重之由、申_レ之。東鑑

水怪

建保四年三月七日、海水變_レ色、赤如_レ浸_レ紅。東鑑

石

寛喜二年十一月八日云、大進僧（都）觀基、參_二御所

（一）、申云、去月十六日夜半、陸奥国芝田郡石如_レ雨下。件石一、進_二將軍家_一、賴經（二）。大如_レ柚細長也。有_二廉石_一下事、廿四里云云。東鑑

水怪

宝治元年三月十一日云、由比浜（潮）變_レ色、赤而如_レ血。諸人群集見_レ之。東鑑 同年五月廿九日云、三浦五郎左衛門尉、參_二左親衛御方_一申云、去十一日、陸奥国津輕海辺大魚流寄。其形偏如_二死人_一。先日由比海水赤色事、若_レ此魚死故歟。隨_テ而同_キ比、奥州海浦、波濤、赤而如_レ紅。此事則被_レ尋_二古老_一之處、先規不快之由申_レ之。所謂文治五年夏、有_二此魚_一同_キ、泰衡誅戮。建仁三年夏、又流_二来同秋田_一。左金吾 賴家 有_二御事_一。建保元年四月出現、同五月私建曆二年歟。義盛大軍殆為_二御大事_一云云。東鑑 私云、今年六月、若狹前司泰村謀叛、而及鎌倉兵乱。宝治二年十一月十五日云、陸奥国留守所注申云、去九月十日、津輕海辺大魚死而浮_レ寄。如_二人形_一。東鑑

水怪

宝治二年六月九日、相模河、水、其流如_レ血。觀者怪_レ之、試_ニ浸_ニ白布_一、移_ニ其色_一、殆如_ニ紅梅_一。東鑑 同月十六日云、相模河（水）、赤色漸薄。

山

宝治元年九月十六日云、相模国毛利庄、山中有_ニ怪異等_一。毎夜田楽_ノ粧_{スル}之由、土民等言上_一。東鑑

水怪

建長四年二月廿八日云、申尅、自_ニ腰越海上_一至_ニ和賀江津_一、而池之水如_レ血。広三丈許。及_レ晚消滅畢。

東鑑

海

むかし河内守頼信上野守にてありし時、坂東に平忠恒といふ兵ありき。仰らるゝことなきかことくす。うたんとておほくの軍おこして、かれかすみかの方へ行むかふ。入海のはるかにさし入たるむかひに家をつくりてゐたり。この入海をまはる物ならハ、七八日にめぐるへし。すぐにわたらハその日の中にせめつへけれハ、忠恒、わたり

の舟ともをミなとりかくしてけり。されハわたるへきやうもなし。浜はたに打立てこの浜のまゝにめぐるへきにごそあれと、兵共思ひたるに、上野守のいふやう、この海のまゝに思てよせば、日比へなん。その間に逃もし又寄られぬかまへもせられなん。けふのうちによせてせめんこそ、あのやつハ存外にして、あハてまどはんすれ。しかるに船共ハミなとりかくしたる。いかハすへきと、軍ともにとハれけるに、軍共、更に渡し玉ふへきやうなし。廻てこそよせさせ給へく候へと、申けれハ、此軍ともの中に、さりとて此道しりたるものハあるらん。頼信ハ、坂東方ハこのたひこそはしめてミれ。されとも我家のつたへにて聞おきたる事あり。この海の中にハ堤のやうにて、ひろさ一丈はかりして、（すぐに）わたりたる道あるなり。深さハ馬のふとはらにたつときく。この程にごそ、その道ハあたりたるため。このおほくの軍ともの中にしりたるもあるらん。さらハさきにたちてわたせ。頼信つゝきてわたさんとて、馬をかきはやめてよりけれ

ハ、しりたるものにや有けん、四五騎はかり馬を海に打
おろして、たゝわたりにわたりけれハ、それにつきて五
六百騎斗の軍共わたしけり。まことに馬のふと腹にたち
てわたる。おほくの兵共の中に、たゝ三人はかりそ、こ
の道ハしりたりける。残ハ露もしらさりけり。きく事た
にもなかりけり。然シカルにこの守殿、此国をハ、これこそ
はしめにておはするに、我にハこれの重代のものともに
てあるに、聞たにもせずしらぬに、かくしり給へるハ、
げに人にすぐれたる兵の道かなと、みなさゝやきおちて
わたりけり。宇治拾遺

海 ①②ノ部へモ入ル

新田義貞退兵二万余騎ヲ卒シテ、廿一日（王慶二年五
月）ノ夜半計ニ片瀬腰越ヲ打廻リ、極楽寺坂へ打ノゾミ苳給
フ。明行月ニ敵ノ陣ヲ見給へハ、北通マテ山高ク路嶮キ
ニ、木戸ヲ誘カマへ垣楯ヲ搔テ、数万ノ兵陣ヲ及へテ並居タ
リ。南ハ稲村崎ニテ、沙頭路狭キニ、浪打涯ナミマテ逆木ヲ
繁ク引懸テ、澳四五町カ程ニ大船共ヲ並へテ、矢倉ヲカ

キテ横矢ニ射サセント搆タリ。誠モ此陣ノ寄手叶ハテ引
ヌランモ理也ト見給ケレハ、義貞馬ヨリ下給テ、甲ヲ脱
テ海上ヲ遙々ト伏拝ミ、竜神ニ向テ祈誓セウシ給ケルハ、伝
承ル、日本開闢ノ主伊勢天照太神ハ、本地ヲ大日ノ尊像
ニ隠シ、垂跡ヲ滄海ノ竜神ニ顯シ給ヘリト。吾君其苗裔
トシテ、逆臣ノ為ニ西海ノ浪ニ漂給フ。義貞今臣タル道
ヲ尽シ為ニ、斧鉞ヲ把テ敵陣ニ臨ム。其志偏ニ王化ヲ資
ケ奉テ、蒼生ヲ令レ安トナリ。仰願ハ内海外海ノ竜神
八部、臣力忠義ヲ鑑給テ、潮ヲ万里ノ外ニ退ケ、道ヲ三
軍ノ陣ニ令開給ヘト、至信ニ祈念シ、自ラ佩給ヘル金作
ノ太刀ヲ拔テ、海中へ投給ケリ。真ニ竜神納受ヤシ給ヒ
ケン、其夜ノ月ノ入方ニ、前々更ニ千ル事モ無リケル稲
村崎俄ニ二十余町干上ツテ、平沙渺々タリ。横矢射ント
搆タル数千ノ平船モ、落行塩ニ被レ誘テ、遙ノ澳ニ漂
ヘリ。太平記

江

承平ノ比、倭藤太秀郷ト云者有ケリ。或時比秀郷只一人、

勢多ノ橋ヲ渡ケルニ、長二十丈計ナル大蛇、橋ノ上ニ横テ伏タリ。〔中略〕若尋常ノ人はヲ見ハ、目モクレ魂消テ則地ニモ倒ツヘシ。サレトモ秀郷天下第一ノ大剛ノ者也ケレハ、更ニ一念モ不レ動シテ、彼大蛇ノ皆ノ上ヲ荒ニ蹈テ、閑ニ上ヲソ越タリケル。然レ共大蛇モ敢不レ驚、秀郷モ後ヲ不レ顧シテ遙ニ行隔タリケル処ニ、怪ケナル小男一人、忽然トシテ秀郷カ前ニ來テ云ケルハ、我此橋ノ下ニ住事已ニ二千年也。貴賤往來ノ人ヲ量リ見ルニ、今御辺程ニ剛ナル人ヲ未レ見。我二年來地ヲ争フ敵有テ、動ハ彼力為ニ被レ惱。可レ然ハ御辺我敵ヲ討テタビ候ヘト、懇ニコソ語ヒケレ。秀郷一義モ不レ謂、子細有マシト領狀シテ、則此男ヲ前ニ立テ、又勢多ノ方ヘソ帰ケル。二人共ニ湖水ノ波ヲ分テ、水中ニ入事五十余町有テ、一ノ樓門アリ。開テ内ヘ入ルニ、瑠璃ノ沙厚ク、玉ノ甃イシタミ暖ニシテ、落花自續紛タリ。朱櫓紫殿玉欄干、金ヲ鎔ニシ銀ヲ柱トセリ。コシリ其壯觀奇麗、未曾テ目ニモ不レ見、耳ニモ不レ聞シ所也。此怪ケナリツ

ル男、先内ヘ入テ須臾ノ間ニ衣冠ヲ正クシテ、秀郷ヲ客位ニ請ス。左右侍衛ノ官、前後花ノ粧、善尽シ美尽セリ。酒宴數刻ニ及テ夜既ニ深ケレハ、敵ノ可レ寄程ニ成ヌト周章騒ク。秀郷ハ一生涯ノ間身ヲ放タテ持タリケル五人張ニ、セキ弦懸テ嚙ヒ濕シ、三年竹ノ節近ナルヲ十五束三伏ニ拵テ、鏃ノ中子ヲ筈本迄打トホシニシタル矢只三筋ヲ手挾ミテ、今ヤノソ待タリケル。夜半過ル程ニ、風雨一通リ過テ、電火ノ激ス事隙ナシ。暫有テ比良ノ高峰ノ方ヨリ、焼松タイマツ二三カホト二行ニ燃テ、中ニ嶋ノ如ナル物、此竜宮城ヲ指テソ近付ケル。事ノ体ヲ能々見ニ、二行ニトホセル焼松ハ皆己カ左右ノ手ニトモシタリト見ヘタリ。アハレ是ハ百足蛭ノ化タルヨト心得テ、矢比近ク成ケレハ、件ノ五人張ニ十五束三伏、忘ル、計引シホリテ、眉間ノ真中ヲソ射タリケル。其手筈鉄ヲ射ル様ニ聞テ、筈ヲ返シテソ不レ立ケル。秀郷一ノ矢ヲ射損シテ、不レ安思ケレハ、一ノ矢ヲ番テ一分モ不レ違、能ト前ノ矢所ヲソ射タリケル。ツホ此矢モ又前ノ如ニ躍

返テ、是モ身二不^レ立ケリ。秀郷二ノ矢ヲハ皆射損シツ、
憑所ハ矢一筋也。如何セント思ケルカ、屹ト案シ出シタル
事有テ、此度射ントスル矢サキニ唾ヲ吐懸テ、同矢所
ヲ射タリケル。此矢ニ毒ヲ塗タル故ニヤ依ケン、又同
矢所ヲ三度迄射タル故ニヤ依ケン、此矢眉間ノタ、中ヲ
徹リテ、喉ノ下迄羽フクラ責テソ立タリケレ。二三
千ト見エツル焼松モ（光）忽ニ消テ、嶋ノ如ニ有ツル物、
倒ル、音大地ヲ響カセリ。立寄テ是ヲ見ルニ、果シテ百
足ノ蛭也。竜神ハ是ヲ悦テ秀郷ヲ様々ニモテナシケルニ、
太刀一振、巻絹一、鎧一領、頸結タル俵一ツ、赤銅ノ
撞鐘一ツヲ与テ、御辺ノ門葉、必將軍ニナル人多カルベ
シトソ示ケル。 太平記

海

康安元年七月、阿波ノ鳴戸俄ニ潮去テ陸ト成ル。高ク
峙タル岩ノ上ニ、筒ノマハリ二十尋計ナル大鼓ノ銀ノ
ビヤウヲ打テ、面ニハバヲカキ、台ニハ八竜ヲ拿ハセ
タルカ顯出タリ。暫ハ見人是ヲ懼テ不^ニ近付^ニ。三四日

ヲ経テ後、近キ傍リノ浦人共数百人集テ見ルニ、筒ハ石
ニテ面ヲハ水牛ノ皮ニテソ張タリケル。尋常ノ^{（マヤ）}発^{（音）}ニテ
打タハ鳴シトテ、大ナル撞木ヲ拵テ、大鐘ヲ撞様ニツキ
タリケル。此大鼓天ニ響キ地ヲ動シテ、三時計ソ鳴タリ
ケル。山崩テ谷ヘ答ヘ、潮浦テ天ニ漲リケレハ、数百人
ノ浦人共、只今大地ノ底ヘ引入ラル、心地シテ、肝魂モ
身二不^レ副、倒ル、共ナク走共ナク、四角八方ヘソ逃
散ケル。其後ヨリハ弥近付人無リケレハ、天ニヤ上リケ
ン、又海中ヘヤ入ケン、潮ハ如^{（レ）}元満テ、大鼓ハ不^レ見
成ニケリ。 太平記三十六

山 尾

観応二年二月三日、將軍^{尊氏}書写坂本ヲ打立テ、一万
余騎（ノ勢）ヲ率シ、光明寺ノ四方ヲ取巻給フ。石堂
右馬權頭城ヲ堅テ光明寺ニ籠シカハ、將軍ハ引尾ニ陣ヲ
取リ、師直ハ泣尾ニ陣ヲトル。名詮自性ノ理、寄手ノ為
ニ何レモ忌々シクソ聞ヘケル。 太平記二十九

野

文和元年閏二月二十日ノ辰尅ニ、武藏野ノ小手差原ヘ打臨玉フ。大将ニハ新田武藏守義宗云々。〔中略〕新田少將

義宗、旗ヨリ先ニ進テ、天下ノ為ニハ朝敵也、我為ニハ親ノ敵也。只今尊氏カ頸ヲ取テ、軍門ニ不_レ曝、何ノ時ヲカ可_レ期ト、自余ノ敵共ノ南北ヘ分レテ引ヲハ少モ目ニ懸ス、只ニ引兩ノ大旗ノ引クニ付テ、何クマテモト追蒐玉フ。引モ策ヲ挙ケ、追モ逸足ヲ出セハ、小手差原ヨリ石浜マテ、坂東道已ニ四十六里ヲ片時カ間ニソ追付タル。將軍石浜ヲ打渡玉ヒケル時ハ、已ニ腹ヲ切ントテ、鎧ノ上帶切テ投捨テ、高紐ヲ放サントシ玉ヒケルヲ、近習ノ侍共ニ十余騎、返シ合テ、追蒐ル敵ノ河中マテ渡カ、ルト、引組引組討死シケル其間ニ、將軍急ヲ遁レテ向ノ岸ヘカケ上リ玉フ。太平記三十一

山

承和十四年十月、双丘東墳授ニ從五位下。天皇嵯峨游獵時、駐_ニ馭_一於墳上_ニ以為_ニ四望之地_一。故有_ニ此恩_一。續日本紀今專_ラ謂_フ之_ヲ内山_ト。雍州府志内山_ハ在_ニ法金剛院_一庭前

（東北）_ニ号_{ルコトハ}則在_ニ院内_一謂也。山城名跡志

湖

遼古_{スイコノ}世、丹波国皆湖也。其水赤_シ。故云ニ丹波。大山咋神、決_ニ其湖_一、丹波ノ水涸_{カレテ}成_レ土矣。以鋤為_ニ神体_一。此神者、即松尾、大神也。神代系図伝

山

ちかくて速きもの。〔中略〕くらまのつゝらをりといふ道。
枕草紙

山

峯延、東寺十禪師也。一日望_ニ北山_一、有_ニ紫雲_一。延出_レ寺向_ニ北行_一、尋_ニ雲起處_一、至_ニ鞍馬寺_一。日已暮、敲_ニ燵焚_レ木。禪座、居数日。一夜女鬼来向_ニ火_一。延起入_ニ堂後_一、朽木中_ニ鬼_一逐至_テ、怒_目動_レ臂。延念_ニ毘沙門_一、忽朽木自倒、打_ニ殺_一鬼。翌日大中大夫藤伊勢人、入_ニ山見_ニ延_一、臥。問曰、師何人。何故_ニ臥_一乎。対曰、我来_ニ此_一已五日、而不_レ食。故臥耳。大夫便洗_ニ粳米_一、飲_ニ白漿_一。漸薦_ニ膳_一。延語_ニ来_ニ此_一事及婦鬼死_一。大夫署_ニ延_一、為_ニ寺主_一。夏五月、延修_ニ護

摩。日中大蛇自_ニ北嶺_一来。目如_レ電、舌如_レ火。延誦_ニ毘沙門呪_一。蛇俄_ニ自_テ斬_テ為_ニ段々_一。三日後、大夫来見_ニ段蛇_一。婦闕_ニ以_テ聞_ス。勅_ニ發_{シテ}役夫五十人_一、弃_ニ蛇_{シム}靜原山_一。俗呼_ニ其地_ヲ為_ニ大虫峰_一。延_ハ々喜中_ニ逝_ス。釈書卷九

川

續日本紀 卷十五 天平十五年六月癸巳、山城国言_ス。今月十四日自_レ西至_レ戊字治川_ノ、水涸竭、行人揭步_{マテ}。_{ママセ}

山

本朝、高山富山為_ニ第一_一。坂路至_ニ絶頂_一、九里余。直立而算_レ之、其高二十五町也。第二愛宕山也。坂路至_ニ絶頂_一五十町。是又直立而数_レ之、則其高八町余也。第三比叡山也。攀躋則五十町余、直立六町余也。雍州府志 **私**愛宕_{ママダテ}日枝_ノ外、高山甚多_シ。信州浅間及御獄、豆州天城、相州箱根及大山、総州筑波、羽州湯殿之類、不_レ遑_ニ枚挙_一。是只至_ニ拳_一山州勝地_一。以_ニ愛宕比叡_一、置_ニ富士之次_一耳。

谷

朗詠谷_ハ、在_ニ長谷_一。四条、大納言公任卿、閑_ニ居此谷_一、撰_ト倭漢朗詠集_ニ云_フ。雍州府志

(しばた みつひこ 跡見学園女子大学教授)

(たにわき まさちか 早稲田大学文学部教授)

(きら すえお 早稲田大学文学部教授)

(はりもと しんいち 大東文化大学助教授)

(ふたまた じゅん 早稲田大学大学院学生)

(かきもと みち 早稲田大学大学院学生)